

凱達格蘭・巴賽語

Ketagalan・Basay — 從記憶到再生

[首頁](#) [文法](#) [教育推進](#) [研究成果](#) [研究筆記](#) [語音合成](#) [辭典](#)

[ホーム](#) / [研究成果](#) / [本稿](#)

[中文](#) [日本語](#) [English](#)

巴賽語宜蘭方言 (source=T+M) の音節目録

——カバラン語との言語接触の観点から——

著者：蔡永桂 (Yung-kuei Tsai)

日付：2026年6月23日

種別：原著論文 (言語接触 / 音韻計量分析)

ライセンス：CC BY 4.0 **引用識別**：basay.tw/research/2026-06-basay-syllable-TM/

要旨 Abstract

本稿は、巴賽語辞書データベースのうち Trobiawan 資料 (source=T: 文脈付き採集、source=M: 語彙のみ採集、合計1,129エントリ) を対象として音節目録を計量的に抽出し、固有語彙 (source=B) との比較を通じてその言語的特徴を記述する。T+M からは頻度2以上の音節315種・38 onset が確認された。T+M は固有語彙 (B) に存在しない **q**・**z**・**z'** (**ʃ**)・**ɽ'** (**ɽ**)・**mɽ'** (**mɽ**)・**vɽ'** (**vɽ**) を持ち、これらの音素は宜蘭平野において隣接するカバラン語 (噶瑪蘭語) の音韻的特徴と一致する。また、CVVC型 (26種)・クラスター onset (22種) が B (それぞれ7種・6種) を大幅に上回ることも、カバラン語的音節構造との親和性を示す。T+M の

「余剰」音素はカバラン語との言語接触による音韻借用と解釈することが可能であり、台湾北部の言語接触史を照射する事例として注目される。

キーワード： 巴賽語・Trobiawan (T・M)・宜蘭方言・カバラン語・言語接触・音節目録・音韻借用

引用 / Cite this article

APA：

蔡永桂 (2026). 巴賽語宜蘭方言 (source=T+M) の音節目録——カバラン語との言語接触の観点から. basay.tw. <https://basay.tw/research/2026-06-basay-syllable-TM/ja/>

BibTeX：

```
@misc{tsai2026syllableTM_ja,  
  author = {蔡永桂 and Tsai, Yung-kuei},  
  title = {巴賽語宜蘭方言 (source=T+M) の音節目録},  
  year = {2026},  
  month = {6},  
  url = {https://basay.tw/research/2026-06-basay-syllable-TM/ja/}  
}
```

1. はじめに

1.1 T・M ソースの位置づけ

巴賽語辞書データベースには複数のソースコードが付与されており、T と M はいずれも Trobiawan 語彙資料である。T は文脈付き採集（文から取得）、M は語彙のみの採集（文なし）である。両者はいずれも Trobiawan 語彙資料であり、本稿では T+M を一括して「Trobiawan 資料 (T+M)」として扱う。なお S ソース (113件) についてはカバラン語語彙の混入が多いと判断され、本稿の分析対象から除外した。

1.2 カバラン語との地理的關係

カバラン族（噶瑪蘭族）は宜蘭平野を主要居住域とした台湾原住民であり、カバラン語（Kavalan）はフォルモサ語群に属する（Blust 1999）。カバラン語は口蓋垂音 /q/、有声摩擦音 /z/、捲舌側面音 /l/、有声側面摩擦音 /ɟ/ を有することが知られており（Li 2000）、これらはすべて T+M の音節目録に確認される一方、固有語彙（B）には出現しない。

2. データと方法

T（Trobiawan・文脈付き採集）588件および M（Trobiawan・語彙のみ採集）541件、合計1,129エントリを分析対象とした。音節抽出手順は別稿（B 単独分析版）と同一とし、PAN 再建形・**'** 起始音節・頻度1の音節を除外した。

表1 source=T+M 正書法・IPA 対照表

正書法	IPA	説明
n'	ŋ	軟口蓋鼻音
l'	ɭ	そり舌側面音
z'	ɟ	有声歯茎側面摩擦音
o'	ə	中舌中段母音（シュワー）
'（コーダ）	ʔ	声門閉鎖音（前音節韻尾）
q	q	口蓋垂／咽頭音
ts	ts	歯茎破擦音
v	v	有声唇歯摩擦音

正書法	IPA	説明
z	z	有声歯茎摩擦音
j	j~d ₃	接近音または破擦音

重要: T+M には **h** onset・**s'** (ʃ)・**ts'** (tʃ) が出現しない。これらは固有語彙 (B) 固有の音素である。

3. 結果

3.1 全体統計

項目	値
分析エントリ数	1,129件
音節種数 (頻度2以上)	315種
onset 種数	38種
最高頻度音節	ma (92回相当)
中頻度 (10~49回)	53種

3.2 音節構造別分布

構造	T+M 種数	B 種数	差分
V	4	4	0

構造	T+M 種数	B 種数	差分
VC	2	1	+1
VV	2	2	0
VVC	0	1	-1
CV	73	66	-3
CVC	159	134	+25
CVV	27	36	-9
CVVC	26	7	+19
other (クラスター)	22	6	+16
合計	315	266	+49

3.3 T+M 固有 onset の分析

表4 T+M にのみ存在する onset (23種)

onset	IPA	種数	出現回数	カバラン語との関係
q	q	18	128	カバラン語に /q/ が発達 ◎
z	z	21	98	カバラン語に有声摩擦音系列 ◎
ɭ'	ɭ	5	23	カバラン語に捲舌側面音 ◎
z'	ɸ	5	16	カバラン語の側面摩擦音と対応 ◎
mɭ'	mɭ	3	12	カバラン語的クラスター ◎

onset	IPA	種数	出現回数	カバラン語との関係
vɿ'	vɿ	2	4	カバラン語的クラスター ◎
y	j	2	19	—
その他クラスター	—	計16	計~41	—

4. 考察

4.1 カバラン語接触仮説

T+M に固有の音素 **q**・**z**・**z'** (**ʔ**)・**ɿ'** (**ɿ**) はすべてカバラン語の基本音素と一致し、かつ固有語彙 (B) にはまったく出現しない。Thomason & Kaufman (1988) の接触誘発変化の枠組みによれば、T+M における **q**・**z** の高頻度出現 (q: 128回・18種; z: 98回・21種) は単なる借用語の散発的混入ではなく、音節体系レベルでの統合を示唆する。

4.2 CVVC 型の増加とカバラン語の長母音

T+M で CVVC 型が 26 種と B (7種) を大幅に上回ることも注目される。代表例として **maan**・**laan**・**zaay**・**zian** などが確認される。カバラン語は長母音を音韻的に区別し CVVC 構造を許容することが知られており (Li 2000)、これは T+M の CVVC 増加がカバラン語的音節構造の影響を受けた可能性を示す。

4.3 B 固有 onset の不在

固有語彙 (B) に存在する **h**・**s'** (**ʃ**)・**ts'** (**tʃ**) が T+M に出現しないことは、宜蘭方言がこれらの音素を保持しなかったか、あるいは喪失した可能性を示す。特に **h** onset の不在は顕著であり、カバラン語が **h** を有さないことと対応する可能性がある。

5. おわりに

本稿は source=T+M (宜蘭方言) 1,129エントリの音節目録分析を行い、頻度2以上の音節 315種・38 onset が確認された。T+M 固有の onset 23種のうち6種 (q, z, z', l', ml', vl') はカバラン語の音素と一致し、言語接触による音韻借用の証拠と解釈できる。CVVC 型・クラスター型の増加もカバラン語的音節構造との親和性を示す。これらの知見は、宜蘭方言 (T・M) が固有語彙 (B) とは音韻的に異なる体系を持ち、カバラン語との言語接触がその形成に関与したことを示す。

参考文献

- Blust, R. (1999). Subgrouping, circularity and extinction. In E. Zeitoun & P. J.-K. Li (Eds.), *Selected papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics* (pp. 31–94). Academia Sinica.
- Blevins, J. (1995). The syllable in phonological theory. In J. A. Goldsmith (Ed.), *The handbook of phonological theory* (pp. 206–244). Blackwell.
- 李王癸 (1996). 《宜蘭縣南島民族與語言》. 宜蘭縣：宜蘭縣政府.
- 李王癸 (2000). 《台灣南島語言的語音符號系統》. 台北：文鶴出版.
- Thomason, S. G., & Kaufman, T. (1988). *Language contact, creolization, and genetic linguistics*. University of California Press.
- 中央研究院語言學研究所 (編). 《巴賽語辞書データベース》 (basay_dict.jsonl). 台北：中央研究院.

[← 研究成果一覧に戻る](#)

「言語の境界は、接触が刻んだ痕跡。」

© 2026 basay.tw · CC BY 4.0 | [ホームへ戻る](#)